様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３３９０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２３２９

研究課題名（和文）中近世移行期の絵屋の活動と大名コレクションにみるイメージ循環の研究

研究課題名（英文）A study on the effect of the circulation of images on narrative paintings in seventeenth century

研究代表者
龍澤　彩（RYUSAWA, Aya）

金城学院大学・文学部・教授

研究者番号：００３４２６７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：17世紀前半に制作された源氏絵、平家絵などの物語絵を調査対象とし、流派間のイメージ共有と様式の混交の状況、物語絵の定型化を促進した媒体としての扇絵や版本挿図の影響、尾張徳川家をはじめとする近世大名家における絵画の需要状況を検討し、その一端を明らかにした。国内外で作品調査を重ね、メトロポリタン美術館所蔵「源氏物語絵巻」（伝海北友雪筆）の作者の再検討と再評価、これまで詳細な作品研究がなされていなかった、フーリア美術館所蔵「酒呑童子絵巻」、今治市河野美術館所蔵「源平合戦図屏風」等の詳述紹介を行った。期間中4本の論文を刊行（ほか刊行予定1本）、招聘講演（口頭発表）2回を通じて、成果公開を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、流派ないしジャンルを超えてイメージが連関し、その享受層としては近世大名家が重要な役割を果たしていたことが確認できた。本研究が扱った17世紀の作品は、今後も新出ないし再評価の可能性を残しており、本研究で得られた知見は、流派研究の観点からは評価が難しい作品の位置づけを考える上で有効である。また、在外作品を中心に、これまでに詳細な研究がなされていなかった作例を紹介できたことは、今後の日本絵画史研究の一助となる成果である。

研究成果の概要（英文）：By focusing on narrative paintings such as the Tale of Genji and the Tale of the Heike produced in the first half of the seventeenth century, I examined the situation of image sharing and stylistic mixing between schools, the influence of fan pictures and illustrations for printed books as media that promoted the standardization of narrative paintings, and the demand for paintings by the Owari Tokugawa family and other early modern feudal lords. Through surveys of works both in Japan and overseas, I have re-examined and re-evaluated the scrolls of The Tale of Genji (by Kaihoku Yusetsu) in the collection of the Metropolitan Museum of Art, and introduced detailed descriptions of "Shutendoji Emaki" in the collection of the Freer Gallery of Art and "Genpei Kassen-zu Byobu" in the collection of the Kono Art Museum in Imabari, which have not been studied in detail. During this period, four papers were published, and two invited lectures were held to publicize the results.

研究分野：日本美術史

キーワード：日本美術史　源氏絵　物語絵　大名文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

応仁の乱(1467)以降、いわゆる戦国時代を経て江戸幕府が成立する、15 世紀後半から 17 世紀前半を中近世移行期ととらえ、この時期の絵画作品を考察の対象として計画された。中近世移行期の絵画作品については、主として美術史の分野で研究が行われてきており、特に 17 世紀初頭の作品にはしばしば、時代の転換期らしい「斬新さ」が指摘されている。当時の物語絵をめぐる状況を鑑みると、狩野派・土佐派における代替わりや分家、俵屋宗達・岩佐又兵衛・海北友雪といった新興絵師の活躍、「奈良絵本」と呼ばれる絵巻の大量生産、絵入り版本の隆盛など、さまざまな要素がある。現状では、そのそれぞれについて、画派研究、作家研究、文学研究等の観点から研究が行われている状況であるが、17 世紀初頭の作品には、特定の流派の枠に収まりきらない表現上の特色を持つ作品が散見され、従来の研究の枠組みを当てはめることには限界がある。また、伝来が不明な作品も多く、受容者（誰が絵を見たか）という問題は未だ研究の余地を残している。以上のような問題意識が、研究立案・計画の背景となった。

## ２．研究の目的

現存作例数も増加する 17 世紀以降の作例は、今後も新出作品が見出される可能性を多く含んでおり、また、従来の研究では必ずしも重視されず個別作品研究がなされていない作例も多い。本研究は、そうした作品を改めて日本美術史上に位置付けるため、中近世移行期の視覚的イメージのあり方を包括的に把握し、作品を美術史の流れに位置付けるための指標を作成することを目指した。本研究では、①流派間のイメージ循環と絵屋の活動（絵巻・絵本類の制作環境の再検討）、②イメージ循環をもたらした媒体（中世から継承された要素の再検討）③大名道具におけるイメージ循環（受容の場における文物交流の再検討）の 3 点を骨子とし、それぞれの状況についての解明を目的とした。

## ３．研究の方法

①流派間のイメージ循環と絵屋の活動の研究　―絵巻・絵本の制作環境の再検討

絵屋は、御用絵師の流派に比して「大衆的」と捉えられる傾向があるが、例えば土佐派の中にも「絵屋」と呼ばれた絵師もいたことが文献上確認されており、絵巻や屏風だけでなく、扇絵や冊子挿図なども手がけた、いわゆる High Culture と Low Culture の間に属する存在として再考すべきである。また、この時期は土佐派・狩野派などの流派間でも画題や図様、表現方法が混交する作品があり、個々の作品を熟覧調査することにより、流派間におけるイメージ循環の様相についても検討した。

②イメージ循環をもたらした絵画媒体の研究　―中世から継承された要素の再検討

①で確認するさまざまな制作環境を超えたイメージ循環は、中近世移行期に顕著に見られる傾向であるが、この時期になぜそのような状況が生まれたのかを、絵画媒体(メディア)の面から検討した。特に、室町期に贈答品に広く用いられた扇面画はイメージ流通と深く関わると考えられる。扇や色紙、版本の挿絵などの小画面絵画による図様継承を追いながら、時代の移行期におけるイメージ循環の様相を整理した。源氏絵、平家絵に関しては、版本挿図との関連も看取できた。

③大名道具におけるイメージ循環の研究　―受容の場における文物交流の再検討
婚姻関係などにより、公家・武家の間で文物が動くことによって生じたイメージ循環に着目し検証した。また、春日局の厚遇を受けたされる海北友雪も絵屋として活動しており、近世大名家成立期において享受者層としての武家が絵屋の活動とどのように関わったか、伝承筆者として伝わる作品の検討を通じて、当時の絵画制作の場について研究した。

４．研究成果

国内外の美術館・博物館での作品調査を軸に研究を進め、特に源氏絵、平家絵についての成果が得られた。源氏絵に関しては、これまで海北友雪筆として伝えられてきた「源氏物語絵巻」（米国・メトロポリタン美術館所蔵）の筆者についての再検討を行い、詞書の筆者目録の精査と、絵画の様式比較によって、詞書の書写年代は海北友雪の活動年代からはやや遅れる 1688 年頃が想定できることを明らかにした（この研究内容は、2019 年 4 月に米国・コロンビア大学で開催されたシンポジウム「シンポジウム「Illuminating The Tale of Genji: New Art Historical Perspectives」にて発表）。本研究では 17 世紀の作例を中心に扱ったが、それらの作例が継承した中世源氏絵の流れを抑えるため、毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」（江戸時代・17 世紀）などを手がかりにして、土佐光茂様式とも言うべき源氏絵が制作されていたのではないかとの仮説を提示した（口頭発表「毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」から見る室町時代源氏絵」、シンポジウム「室町時代源氏絵研究の最前線 」2019 年 12月25日・於立教大学）。また、平家絵に関しては、海の見える杜美術館所蔵「平家物語絵扇面画帖」、今治市河野美術館所蔵「源平合戦図屏風」の作品紹介を通じて、近世平家絵における図様の共有と流派様式の混交の様相を研究し、論文を執筆した。また、個々の作品研究を行う中で、17 世紀に制作された作例と大名家における需要が深く関わっていることを改めて確認した。尾張徳川家の所蔵品研究に関しては、論文「尾張徳川家の大名道具に見る八幡信仰 家祖尊崇とのかかわりから」、『説話文学研究』第 53 号）でその一部を発表したほか、これまで詳細な研究がなされていなかった、米国・フリーア美術館所蔵「酒呑童子絵巻」についても、大名道具としての意義を確認し、再評価することができた（口頭発表「フリーア美術館所蔵「酒呑童子絵巻」について」、研究集会「フリーア美術館所蔵作品を通した日本絵ものがたり文化遺産の発見―絵巻を中心にその世界を探求する―」2019 年 3月20日・於フリーア美術館。同内容の論文刊行を予定。）

大名道具研究としては、細川家伝来の源氏絵（「源氏物語扇面貼交屏風」等）の熟覧調査を実施したものの、概ね徳川家関連に留まった。今後は、他の大名家の絵画コレクションについても視野を広げ、発展的研究として取り組みたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>龍澤彩 | ４．巻<br>第15巻第一号 |
| ２．論文標題<br>「扇と物語絵に関する一考察」 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>『金城学院大学論集（人文科学編）』 | ６．最初と最後の頁<br>145-156 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>龍澤彩 | ４．巻<br>第53号 |
| ２．論文標題<br>「尾張徳川家の大名道具に見る八幡信仰　家祖尊崇との関わりから」 | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>『説話文学研究』 | ６．最初と最後の頁<br>36-47 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>龍澤彩 | ４．巻<br>94 |
| ２．論文標題<br>金城学院大学所蔵「源氏物語図扇面」について | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>『金城日本語日本文化』 | ６．最初と最後の頁<br>15-38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>龍澤彩 |
| ２．発表標題<br>The Various Phase s of Genji Pictures in the Tale of Genji Scrolls of th e Seventeenth Century:The Medieval to Early Modern Transitional Period a s a “Compendium of Gen ji Pictures” |
| ３．学会等名<br>シンポジウム「Illuminati ng The Tale of Genji: New Art Historical Perspecti ves」（2019年4月13日・於コロンビア大学）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>龍澤彩 |
| ２．発表標題<br>毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」から見る室町時代源氏絵 |
| ３．学会等名<br>シンポジウム「室町時代源氏絵絵研究の最前線 」(2019年12月25日・於立教大学）（招待講演） |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>龍澤彩（小林健二編・他11名共著） | ４．発行年<br>2020年 |
| ２．出版社<br>三弥井書店 | ５．総ページ数<br>213 |
| ３．書名<br>『絵解く　戦国の芸能と絵画　描かれた語り物の世界』掲載の論文「江戸時代前期の平家物語図扇面について―海の見える杜美術館所蔵「平家物語扇面画帖」を中心に」 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>龍澤彩（宇治源氏ミュージアム編・他9名共著） | ４．発行年<br>2021年 |
| ２．出版社<br>吉川弘文館 | ５．総ページ数<br>208 |
| ３．書名<br>『光源氏に迫る　源氏物語の歴史と文化』掲載の論文「源氏絵を読む　宇治市源氏物語ミュージアム所蔵「源氏絵鑑帖」を例に」 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|